
夏の魔

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の魔

【Nコード】

N6758M

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

なあ、“夏の魔”って知ってるか。

クラスメイト、“礼人”の口から飛び出した都市伝説めいた存在。曰く、それは夏の日差しが作り上げた影の中に棲み、日差しの中を歩くモノを深い影の底に引きずり込むのだという。“礼人”のとはつちりを受ける形で罰のプール掃除をする羽目になった“私”は最初、そんなもの、まったく信じていなかった。

だが、その礼人が、何の前触れもなくプールから姿を消した。そして、“私”は知ることになる。“夏の魔”からは逃げられない

いのだと。

夏ホラー2010参加その2。

夏の影は深い。まるで、夜の闇みたいに。

自分の足元に出来る陰を眺めながら、ふと思った。

水道の蛇口から水がほとばしる。太陽の欠片たちが水を通して虚ろに光る。そうしてすぐに重力のくびきに従う水たちは、用意してあったネズミ色のバケツの中に落ちてなみなみとたまっていく。ふと麦わら帽子の縁から太陽の様子をうかがう。やっぱり、太陽は暴力的だった。水場だというのに、プールサイドには陽炎が舞い乱れていた。もう昼の三時は回っているはずなのに、まだまだ太陽の怒りが収まる様子はない。

じりじりと肌が焼ける感覚。水色をしたプールサイドも、涼しげな色に反して、まるで火にかけられた鉄板のように暑くて、私の足裏をじりじりと焼いていく。

スクール水着の上に着ているＴシャツの裾をしばってから、私は蛇口をひねって水を止め、なみなみとたまったバケツの取っ手を握った。思いのほか重いバケツにふらふらしながら、プールサイドを進む。

すると、プールサイドの向こうにいる人影が、私を呼んだ。

「おーい、遅いぞー！」

間延びした声。しかもその声の主は、水色と白のラインが交互に入った日よけ屋根の下にいる。炎天下で水汲み、その上その水を運ぶ私としては、なんだか釈然としなかった。だから、勢い受け答えも乱暴になる。

「そう思うんだったら手伝いなさいよ！」

「だってさ、暑いだらー？」

「暑いのは私だって一緒！」

すると、日よけ屋根の下から、のっそりと声の主が現れた。屋根の下が夜のように暗いので、私の目には声の主が真っ黒い壁からぬ

うつと現れたようにも見えた。

私と同じように、水着の上にＴシャツ姿。けれど、Ｔシャツで隠しきれない筋肉質な胸板は女の私と比べるべくもない。肩から首の辺りの筋が浮き立っていて、無駄のない細身のシルエットを描いている。そして、屈託なく頬を緩める姿はイマイチ憎めない。

その少年　礼人　は、後ろ頭を掻いた。

「分かったよ。うん、分かった。手伝うよ」

なぜか不承不承な様子の礼人。

「あのねえ」私は言った。「そもそも、こんなことになってるのはアంతのせいなのよ!？」

「へいへい」

そう言いつつも、礼人はちよろつと赤い舌を出した。

そう。こんな暑い最中にプールにも入らずに水汲みをしているのには理由がある。

それもこれも、礼人のせいだ。

四時間目の英語の授業中のことだ。四時間目となると、お昼休みの直前、しかも一日で一番暑い時間帯ということもあって、クラス中に倦怠感とげんなり感、そして淡い機会感が渦巻く時間だ。そんな空気の中、隣の席に座る礼人が、私のことをつついた。

『おい、“夏の魔”って知ってるか』

いつものことだ。授業に飽きると礼人は他の生徒に話しかけ、暇を紛らわそうとする。いつものことなのだけれど、礼人の口っ振りがあまりに爽やかで、その言葉を跳ねのけることがいつも出来ない。ナツノマ。その聞き慣れない音節に戸惑う私を尻目に、礼人は小声で続けた。

『“夏の魔”。春夏秋冬の夏に、魔王の魔。“夏の魔”だよ。なんだ、知らないのかよ』

夏・の・魔。私は心の中でその三文字を思い浮かべてみた。だが、何のことなのか分からない。

さも知っているのが当然であるかのような口ぶりにムツとしなが

らも、私は話の先を促した。すると、得意満面の顔をしながら、礼人は切り出してきた。

『“夏の魔”ってのはな』

けれど、その礼人の言葉は、授業をしていた英語教師の耳に入った。私たちのクラス担任でもあるその英語教師は礼人の私語を見つけるや、思い切り怒鳴りつけてきた。これでもかというほどに。きつと、クラス中に漂う暑すぎる空気がまずかったのだ。そして、その怒りは聞きたくもない話を聞いていた私にも向けられることとなり、担任という権威を生かして件の英語教師くたんは私たちに放課後のプール掃除を命じたのだった。

思い出しても腹が立つ。

悪いのは礼人なのに、そのとばっちりを食うなんて。

しかも、その当の礼人、反省してない上に罰のプール掃除にもやる気が出ないようだ。それがさらに私の怒りの沸点を低くする。ただでさえ、暑い空気によって私の心が煮えたぎっているというのに、そんな私の空気に気付いたのか、さっと私の前に立った礼人は、私がつとの体で持っていたバケツを軽々とひったくった。

「へいへい。分かったよ。持てばいいんだろ？」

「うん、よろしい」

私が頷くと、礼人はプイと向こうを向いてしまった。けれど、思い出したように振り返って、いつもの悪戯っぽい顔をこちらに向け

た。

「何？」

その顔を咎める。すると、少し口角を上げながら、礼人は口を開いた。

「そういえばさ、さっきの話、まだ全部してなかったよな」

礼人は歩き始めた。私もその隣に続く。軽々しくバケツを運ぶ礼人は本当に涼しげだった。

「え？ 何の話よ」

「ほら、あれだよ。“夏の魔”の話」

ああ。このプール掃除の原因を作った話か。心の中で一人ごちた。本当だったらあんまり興味がない上、どちらかというと聞きたくなかった。けれど、今日はあまりに暑すぎた。それに、こんな暑い日に涼しげな顔をした礼人が何を喋ろうとしているのか、興味が湧いたのも事実だった。

促すと、礼人は言った。

「最近、流行している都市伝説だよ」

「都市伝説、ねえ」

急速に興味の熱が去っていく。都市伝説なるものに対して、乗り切れないものを感じている私がいる。幽霊が出てくるだの魔の交差点だのを信じるのは小学生の間だけだ。高校生にもなって真面目に話すことでもない気がしている。

だが、そんな私の白けた空気に気づかないのか、礼人は続けた。礼人の歩みに従うように、バケツの中の水がちゃぽん、と鳴った。

「ああ。それはまるで、蟻地獄みたいなものなんだってさ」

「蟻地獄？」

砂で出来た落とし穴の真ん中に鎮座する大きな顎をもった甲虫が頭を掠める。土色の身体で擬態し、まるでクワガタのような顎を天に伸ばして牙をとぎ、哀れにも落とし穴に落ちた蟻をバリバリと食べるあの凶悪で醜悪な甲虫の姿を。

「待ち構えてガバツ、だよ」

礼人の言うところはこうだ。

“夏の魔”。それは、日差しの強い日に出来る深い影の中に、その身を置いている魔物なのだという。今日みたいな夏の日、太陽の当たるところはさながら雪景色のように真っ白だ。だが、太陽の当たらないところに目を向ければキャンパスに塗られた黒い絵具よりも深く暗い黒が支配している。色という色がすべて太陽光によっておしなべられてしまつて、白と黒しかないような日。

そんな時、夏の魔は暗黒の側にいる。夏の魔は深い影の中に好んで居座り、日差しの中を歩くモノにひっそりと食指を伸ばす。そして

。

「影の世界に人を引きずり込んでしまふんだと。で、引きずり込まれたヤツの姿をこれ以降見た者はいない」

「信じるかどうかはあなた次第”ってやつ?”」

都市伝説芸人のお決まりの言葉を掛けると、何が可笑しいのか礼人は笑った。

「まあ、そんなところ」

馬鹿馬鹿しい。

私は礼人から目を離し、プールの水面を見つめた。真っ白に輝く水面。太陽光を反射する更衣室の屋根。そして、その屋根の下に広がる、全てを飲み込みそうな深い闇。黒と白のコントラストしかない世界が、そこに広がっていた。

ガシャン。

耳をつんざくような音。そして水がはねる音がした。

慌てて振り返った。その瞬間、足が水に濡れた。足元にはガラランガランと音を立てるバケツが転がっていた。転がるバケツには殆ど水が残っていないかった。こぼれた水は私の足を濡らし、プールサイドに沁みを作った。

なのに、そこにいるべき筈の人がいない。

「あれ？ 礼人？」

そう。礼人がどこにもいなかった。

ここはプールサイド。見通しはいい。しかも、隠れるようなところはない。もしかと思いプールの中を覗いてみた。だが、水色の塗装がされているプールに人の影はなかった。

礼人が、消えた？

私は辺りを見渡した。だが、近くには日避け屋根付きのベンチがあるだけで、あとは何もない。繰り返すが、隠れるところなど何処にもない。

「礼人？ ねえ、礼人？」

私は礼人の名を呼んだ。だが、答えは返ってこない。風に揺れるネズミ色のバケツだけが、がらんがらんと私の声に合いの手を入れただけだった。

何度も何度も頭を振って辺りを確認するうちに、私はあることに気付いた。

何かが変だった。

確かに、目の前に広がる光景はさっきまでのプールサイドそのものだった。だが、何かが違う。さっきまで見ていたものから大事な魂のようなものが抜け去ってしまった、まるで抜け殻のように虚ろな印象になっている。広がるプールサイドも、なみなみと水がたまるプールも、そして遠くに見える更衣室や体育館、学校、そして空の景色さえも、まるでテレビの光景であるかのように、その存在感をあやふやなものにしていた。

そこにあつたのは、ただの光景だった。そう。白と黒しか存在しない、極端な色遣いの光景。

不意に、私の両肩に、重苦しい何かが乗ってきた。

理屈ではなかった。私の頭以外のどこかが必死で告げている。

“ここにいてはいけない”と。

瞬間、戸惑いも躊躇もなく、私は踵を返して走った。ヒタヒタと音を立てながら、プールの出口目指して。プールサイドを抜け、腰洗い場を避け、足洗い場の水面を乱しながら進み、入口の扉の前に立った。

扉といっても、それは普通の扉ではない。ひし形に編まれた緑色の鉄線を扉形の骨組みに張り付けて扉と仕立てているものだ。外から鍵がかけられるように、かんぬき門と南京錠が外に向けて設置されている。私たちがここに入ってくるときには、当然南京錠を開けて門を引き抜いて扉を開いたのだ。そして、このタイプの鍵は外側からじゃないと開けたり閉めたりができない。

にも拘らず、私の目の前にある扉には外から門がかかり、その上南京錠がしっかりと施錠されていた。真っ黒な門と、太陽光を反射

して金色に輝く南京錠が、私を嘲笑^{あざわら}う。

どうなってるの？

考えられることは一つだった。

何者かが、外から鍵を掛けたのだ。門を嵌^はめ、さらに南京錠を掛け、私を閉じ込めたのだ。

誰が？

分らない。

考えられる一番の可能性は礼人だった。あの夏の魔とやらの話にかこつけて、私に悪戯を仕掛けている可能性を考えた。だけど、礼人はここまで手の込んだ悪戯をしない。やるとして、突然姿を消すところまでだ。鍵を外から掛けるなんて悪辣なことはしない。

じゃあ、他の生徒が誤ってカギを掛けたのだろうか。だが、この学校のプールは校庭の端っこにあり、下校途中の生徒たちの目に留まらないところにある。行こうと思わないとそうそう来ないところにプールは立地しているのだ。

だが、私の肚は結局“礼人が犯人”だという結論に至った。

「礼人！ あんたいいいかげんにしなさいよ！ 全然笑えない！」

ガシャガシャと扉を前後に揺らした。だが、音だけが辺りに響くばかりだった。

礼人の度の過ぎた悪戯。そう踏んだ。

それが一番、合理的な答えだった。

「どこにいるのよ！」

がなり立てながら私は辺りを見渡した。だが、人影一つない。遠くに見える校庭も、校舎の窓の一つ一つにも。そして当然、プールサイドにも人つ子一人ない。足洗い場の水を跳ね上げながら進み、プールサイドに出てもお、私は怒鳴り続けた。

「いいかげんにしなさいよ！ 礼人！」

私の声が軽く反響するだけで、何も答えが返ってこない。

しんとした水面。

不意に風が吹いた。ふうっと水面の上を駆けた風は、少しだけ水

面を揺らして、私の頬を撫でた。

だが、その風は、異様な色を見せた。

ガタガタガタ！ けたたましく、何かが鳴った。

思わず身を仰け反らし、反射的に振り返る。振り返った先には、門が差されてしまった扉があった。だが、私が視線を向けてもなお、扉はガタガタと鳴り響き続ける。まるで、力づくで戸を引き破ろうとしているかのような、ひどく暴力的で荒々しい音。とても風に揺れて鳴るような音とは思えなかった。

い、悪戯？

だが、そんなはずはない。入口の扉は向こうの様子も見えるのだが、ガタガタと鳴り響く扉の向こうには人影などありはしない。ひとりでに鳴っているのだ。あるのはただ、太陽光によって生じた影のみ。

そして。

ガシャンガシャン！

不意に、私の横に立っていた壁が異音を立てた。眼隠しの為か、コンクリート土台の上に金属製のガリリを幾重にも重ねることで壁としているその壁は、いつまで経っても鳴り止まない。何度も何度も、拳骨で叩いているかのような。いや、それも違う。何度も何度も大きな体の何かが体当たりしているかのような音。

私は走った。入口の方には逃げられない。もう私には、奥へ逃げるしか選択肢が残されていない。

私はとにかく混乱していた。

まるで、目に見えない獣に追われているかのような気分だった。走る私のすぐあとを、その獣が追ってくる。姿はない。だが、時折私のすぐ後ろでガシャンと何かが鳴る。逃げるのに必死で後ろを覗く暇なんてなかった。

だが。

不意に音が止んだ。まるで、これまでのことが嘘だったかのように。

足を止めた私は、しばらく後ろを見ることが出来なかった。ほんの少し走っただけなのに、息がすっかりあがってしまっている。跳ねる息を整えながら、私はゆっくりと振り返った。

私の視線の先には、プールの水面とプールサイドの光景が広がっていた。相変わらず太陽光はさんと降り注いで、地面にあるものたちの輪郭を奪っていた。そして、強い光に浮き立つかのように、影はどこまでも深く、暗く、光の届かないところにこびりついていった。

白と黒の世界。

瞬間、私は気づいた。

今、私が立っているところ、そこは。

足元には金属製のバケツが転がっている。熱気を孕んだ風に揺れて、ガラガラと泣いている。

そう、ここは。礼人がいなくなってしまったところだ。そして。

私は背後をうかがった。

後ろには屋根付きベンチがあった。僅か二三歩先、これだけ近いところにいるというのに、影は中の様子を明らかにしてくれない。まるで洞穴の入り口であるかのように、影の闇は深かった。

ま、まさか。

礼人の言葉が蘇る。

影の世界に人を引きずり込んでしまっただ。

ま、まさか。

私は唾を飲んだ。

まったく奥を覗うことのできない闇の中、確かに動くモノがあった。礼人ではない。礼人ではありえない。それは形を持っていない。まるで、水の中に溶けているかのように、それは影の中に溶けていた。にも拘らず、そこにそれが存在する事だけは分かる。

私は走った。“奴は影に棲んでいるんだ”。礼人の言が正しいなら、それは影にしか存在できない。ここはプールだ。見通しがいい。

基本的には影がないところの方が多いのだ。

プールサイドの真ん中で私は立ち止った。そこには一片の影もない。太陽を塞ぐものがなければ陰など出来ないのだ。

ほっと息をついた。その瞬間だった。

真っ暗な闇の一番奥、深奥でうごめく何かが、確かに動いた。

気付いたのが、遅かった。

確かにプールサイドには太陽を塞ぐものは何もなかった。私がそこに立つまでは。そう。私の足元に底なしに暗い闇が出来上がっていた。深く陰湿で、陰鬱な闇が。

最初から、逃げ場など無かった。何処に逃げても無駄だったのだ。もう私は動けなかった。既に足が取られている。

“それ”は私を捕えた。腕も足もない。それはただ圧倒的な闇として存在し、圧倒的な闇を使役して私の自由を奪う。それは、ただ圧倒的であるということ以外には何も理解の及ばない存在。

“それ”には目的すらないのだろう。ただそこに存在し、ただ闇に何かを取り込むだけなのだろう。まるで、獲物を待ち続ける蟻地獄のように。

「な、夏の魔」

その眩きは闇の中に引きずり込まれた。

刹那遅れて、私の意識すらも夏の魔の棲む処へと堕ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6758m/>

夏の魔

2010年10月8日11時44分発行